

短歌大会の現状と課題 高山邦男

短歌の世界を作曲する場、発表する場という視点で考えてみると我々が参加している結社、主に一般読者で形成される新聞歌壇など諸々の集まりがあるが、様々な形で行われている短歌大会にはかなりの参加者があり、歌壇にとつて重要な場になっている。今回はこの短歌大会について考えてみたい。

試しにインターネットで検索を掛けてみると驚くほど多くの大会があり有力なコンテンツであることが分かる。また、短歌祭と名付けている大会もあり、コンテンツという面と併せて皆が集う祭として盛り上がるという意図もあるようだ。

これらを大別すると、応募するのに有料と無料のものがある。このうち無料のものは、各自治体が主催しているケースが多い。「前田純孝賞」「若山牧水青春短歌大賞」など地元・元所に所縁のある歌人を顕彰する文化活動を通して地元を盛り上げる意図があるようだ。観光地の場合集客のための宣伝も兼ねているかもしれない。また、中には「明治神宮献詠短歌大会」のように作品集も贈呈してくれる気前のいい大会もある。こちらは、秋の大祭奉祝とあるので、大祭を盛り上げるイベントという位置づけなのだろう。

有料の方では竹柏会に関わりのある大会として「佐佐木信綱祭短歌大会」がある。ただ、残念ながら今年が最後で閉会になるようだ。理由は運営に関わっていた凌寒会が解散したこと、実行委員の負担が大きく作業が困難になってきたこと、そして一番の理

由は中高生は無料だが一般の部で一首千円を取って運営費に充てていたのだが、詠草が集まらず資金不足で運営が困難になってきたことにある。一方、NHK全国短歌大会は二首一組二千二百円、三首一組三千二百円、十八歳以下でも半額の料金を取る。それなりの値段ながら、約二万首が集まるという。歌壇を代表する歌人が並ぶ豪華な選者、NHKホールという利用がよく立派な会場、何よりテレビで放送される表彰式などに全国大会という名に恥じないスケール感があるからこそ応募者が多いのだろう。

ところで、心の花会員の黒岩剛仁が会長を務めている日本歌人クラブでは全日本短歌大会を主催している。文化庁、毎日新聞社が後援で日本歌人クラブ賞の他、文部科学大臣賞、毎日新聞社賞があり、全日本という名に見合う形になっている。応募料は二首一組二千円。これと併せて全日本学生・ジュニア大会を開催している。こちらは無料。全日本だけの開催ならば赤字にならないのだが、無料の大会の分を賄えるほどの応募はない。ちなみに、今年の全日本の応募数は一三九四首、学生・ジュニアは一三四六五首。およそ一〇倍の格差がある。やはり、有料の大会の詠草集めはなかなか厳しい。それにしても、一三四六五首の応募はNHKにも匹敵する数字だ。各地の学校の先生の協力もあり、短歌の若年層への普及に貢献している有意義な事業となっている。ただ、この事業を継続していくには、歌人クラブの会員減少による会計事情の厳しさもあり、将来的には苦しくなると予想されている。知恵を絞ってはいるが明快な解決策はなかなか見つからない。個人としてこうした事業に協力するという意義を感じて入会してくる人が増えたいのだからだろうか。